

研究主題 **Action Research on
Developing EFL Learners' Willingness to Communicate
(英語学習者の話す意欲を育てる教授法)**

要約：本研究の目的は、中学生の英語発話時に起きる「不安」を軽減しながら、英語発話能力をいかにして伸ばすことができるかを探り、適切な方法を提案するものである。公立中学校の三年生64名を対象に、SPMアプローチを使った検証授業を行い、発話不安の変化・発話技術の伸びを、その前後において、インタビューテストとアンケートにより検証した。6週間にわたる全過程を3期に分け、アクション・リサーチの方法のもと、対象者のニーズや現状に合わせて、柔軟に検証方法を変えながら目標へと進んだ。

キーワード：アクション・リサーチ、発話不安、SPMアプローチ

I はじめに

1.1 現状

筆者の約20年間の英語授業を振り返ってみると、その殆どが、アウトプットの時間を充分にとれないものであった。その原因の一つとして、「理解やインプットが充分なされた後でなければ、アウトプットはできない」と思い込んでいたことが挙げられる。しかし、その授業も、
< 文法導入(英語) → 文法補足説明(日本語) → 本文導入(英語・interaction) → 本文補足説明(日本語) >と、日本語使用割合が多く、インプットも充分でなかったと反省する次第である。「コミュニケーションの仕方」を教えるはずの英語の授業が、入試対策の授業になっており、生徒が活躍するアウトプットの時間を充分に取っていないのに、「どうしたら生徒達に『話す力』がつくのだろう」と悩んできた。生徒達の「話す力」を引き出すため、筆者の意識改革と授業デザインの改良が必要と、本研究に取り掛かった。

1.2 論文の目的

学習者の学習意欲や学習動機を高めながら学びを効果的に支援していくためには、最初から学習者に過度な心理的負担を与えるような内容および活動を選択するのではなく、徐々に内容と活動を高度化していくような手法を選択すべきである(Bennett, 2003)、とある。

本研究では、学習者の心理的負担を軽減しながら、いかにアウトプット能力を高めることができるかに着目した方法と学習効果について検証する。まずはアウトプット活動の組み込み方について考え、その活動時に心理的負担を軽減する。また、段階的にタスクの内容を引

き上げていくアプローチを実施することで、学習動機を高めながら「自分の考えを述べる力」をつけることができか検証する。

II 理論背景

2.1 新学習指導要領で求める「話す力」

2008年に公示された新学習指導要領には、第9節外国語の「言語活動－話すこと」に以下の目標が掲げられている。

- (イ) 自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。
- (ウ) 聞いたり読んだりしたことなどについて、問答したり意見を述べ合ったりなどすること
- (オ) 与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。

しかし、上記の目標に照らしてみても、現時点で育っていない「話す力」は、①「自分の意見を理由をつけながら、筋道を立ててわかりやすく話す力」(→speaking logically)、②「聞き手を意識し、わかる英語を話す力(発音・間・抑揚)」(→delivery)、③「一方通行で終わらず、質問したり、それに答える等、会話を継続させる力」(→interpersonalcommunication)であることがわかった。

2.2 「インプット仮説」と「アウトプット仮説」

Krashenの「インプット仮説」とSwainの「アウトプット仮説」から、現在の筆者に足りないものをあぶり出した。英語＝外国語である以上は、インプットなしではアウトプットはできない。Krashenによると、『理解可能なインプット』を『情意フィルター』が低い状態で行えば、習得は必然となる」という。また、その時のインプットのレベルは“*i+1*”である。ただ、Krashenの言う「理解可能なインプット」を浴びせ続けるだけでは、ネイティブのようなアウトプットは期待できない。統語論的(語の配列等)ミスや、前置詞ミス、同音の動詞を誤って使う等のミスが出てくるからだ。頭では理解できても、イメージ通りのパフォーマンスができないと、イマージョン生徒も証言している。

2.3 「発話不安」とその解決策

「理解可能なインプット」を与えながら、アウトプットの機会をできるだけ与えることで、生徒達の話す能力を発展させられるのだ。しかし、生徒が気乗りして取り組む活動とはどんなものなのだろうか。Burgoonによって作られた言葉“Willingness To Communicate”について、MacIntyreはこう解釈する－<コミュニケーション不安のない状態＋能力認知を肯定できる状態で生まれるもの>。この“WTC”を出させるアプローチとして、Soresi(2005)の「SPMアプローチ」を採用してみる。できるだけ、多く話す回数を与えられ、生徒達を不安にさせない易しいゴールで、尚且つそれを達成することで、“WTC”が出てくると考えられるからだ。

Ⅲ 検証

3.1 第1期

まず、生徒の実態をつかむために、インタビューテストで実技面を、アンケートで意識面を調べてみた。そこからわかったことは、①単語レベルでレパートリーが少ない。②文が頭の中に浮かばないので、ぶつ切りの語・句をカタカナ英語で発音している。③ペアで練習がしたい。④自分の意見を言えるようになりたい。等であった。これらの状況を考えて、「SPM アプローチ」を採用した。この活動は、ペアワークによるスピーキング活動であるが、1回の活動でペアを変えながら3セット行える利点がある。毎回違ったトピックを提示し、30秒間で話させる。間違いは訂正しない。とにかく頭に浮かんでくることを発話させる。評価基準は「30秒間で何文話せたか」である。次セットでは前セットの文数を1文以上上回ればよい。ネイティブスピーカーが1分間で発話する文数が約20文というから、30秒で10文を目指させる。最初はおいそれとそんなに多くの文を発話できるはずもなく、「5文以上話そう」を目標とする。

第1期のテーマは① “What did you do last night?” と② “What did you do this morning?” であった。生徒達は嬉々として取り組んでいた。ペアが変わることが新鮮で、尚且つ1セット目より2セット目、そして3セット目と文数が増える喜びを、単純に味わえるからであった。

3.2 第2期

第2期に入ると、第1期での喜びは次第に薄れ、成績の良い生徒達からは、「正しい文を話したい。」「もっと中身の伴った論理的な文を話したい。」といった意見が聞こえてきた。

第3・第4トピックは、③ “What are you going to do tonight?” と④ “Thing/ Person you like” であったが、第1・第2トピックとは異なり、特に第4トピックは、箇条書き文ではない、1つの内容に的を絞った内容で、理由をつける、詳細を述べる等、論理的に展開しなくてはならないものであった。

また、Soresi や磯田(2009)の実践例を参考に、タスク内容も1ランクアップしたものにした。聞き手は、パートナーの文数をカウントするのではなく、サマライズするというものである。このタスクを付け加えることで、「聞くこと」「相手に分かるように伝えること」を意識させることができたのだった。

3.3 第3期

第3期では、第5・6トピックをそれぞれ、⑤ “Things you want to do in the future” と⑥ “What is Kanazawa/ Japan like?” とし、さらに、タスク内容もサマライズにコメントングを加えて臨ませた。

ところが、これまでの4週間では、期はまだ熟しておらず、トピックについて述べる段階から躓き始める生徒が出てきた。何と、成績が良い生徒でもである。ここで、再度30秒間に論理的に1つの物事について述べられるよう「マッピング」を取り入れ、生徒達が自信を持って発話できるよう指導時間をとった。

また、「話す意欲」についても、考えさせられた。MacIntyre, Dörnyei, Clément, Noels(1998)が言うように、「自信＝不安がない状態＋能力認知が肯定されている状態」の考え方に戻り、自信

を持って発話できる経験数をとにかく増やした。

IV 考察

SPM 活動に対するアンケートをとった結果、次のことがわかった。①スローラーナーへの配慮：SPM で文数が5文は言えるよう別途指導・支援が必要である。②サマライズ&コメンティングは、相当訓練しないと一朝一夕でできるようになるものではない。

また、最終インタビューテスト後の感想からは、仮説で立てた「SPM 活動を取り入れれば、発話不安は軽減しながら、発話技能が上がる」は成しえなかった。これは、テスト方法に問題があったようで、SPM で練習した友達とのペアワークから、いきなり ALT からのインタビュー「テスト」では、不安が軽減されるわけがなかったのだ。また、質問をされることで、「聞きとれなかったらどうしよう。」とか、「Why Question が怖い」などの意見も出てきた。上達したからこそ、「練習してきたのに、それが発揮できなかつたらどうしよう」という思いを持った生徒もいた。これに関しては、活動を重ねたからこそ出てきたい「1つレベルが上がった不安」であると言えよう。

V まとめ

SPM アプローチを利用すれば、50分の授業の冒頭10分程度で、話す機会を生徒に与えることができる。ペアワークを楽しみながら自分の話す内容をスムーズなスピードで話す練習と成り得る。今回は、たった6週間の取り組みであり、成果を見るには時期尚早であった。また、成果を図る方法は ALT によるインタビューテスト以外を実施すべきであった。

1年生の4月から3年かければ発話技能も上がると考えられる。また、自信さえつけば、ALT からのテストも、多少の緊張は免れなくとも、耐えられるはずだ。

短期間では、「自信をつけること」と「不安がないこと」は両立しないが、「努力による自信」が「不安」を超える時は来る。我々、日本の英語教師は、理解可能なインプットと、アウトプットの機会を与えつつ、生徒達が「自信」を持てるまで、経験させてあげなければならないのだ。